

図9 環状列石Aブロック配置図

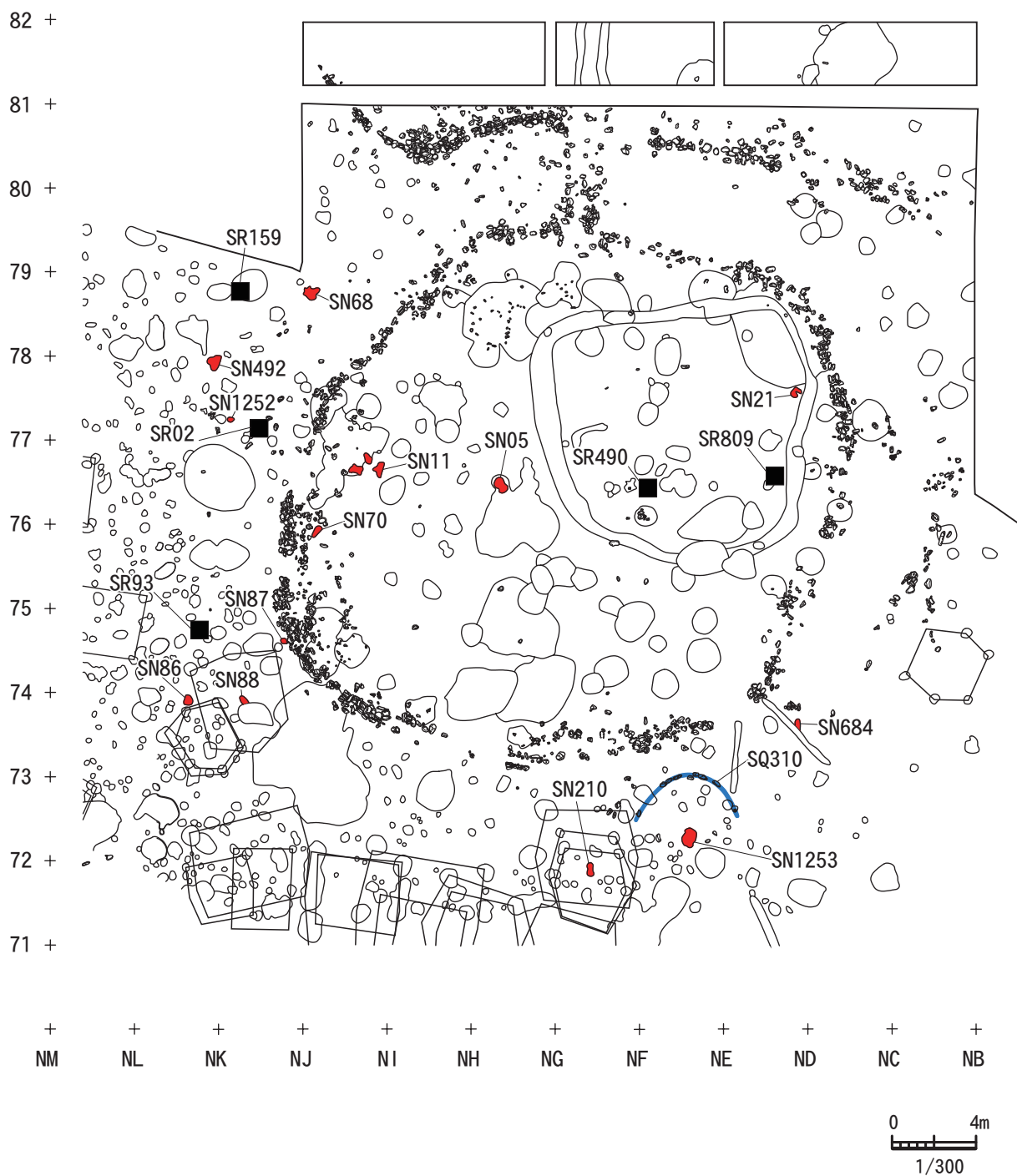


図10 環状列石Aにおける配石遺構・埋設土器・焼土遺構分布図

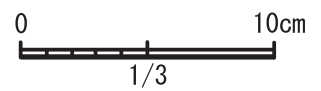
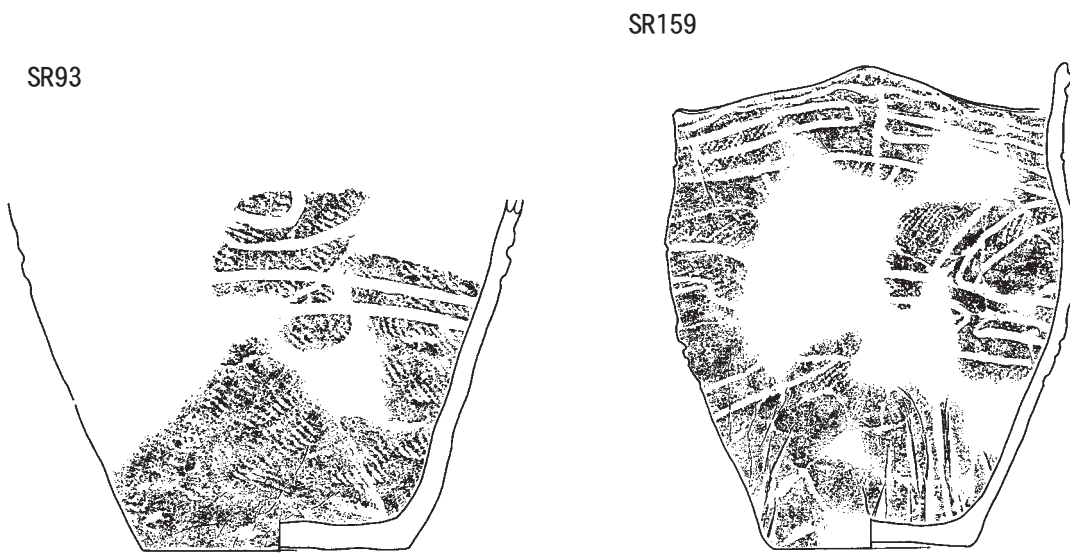
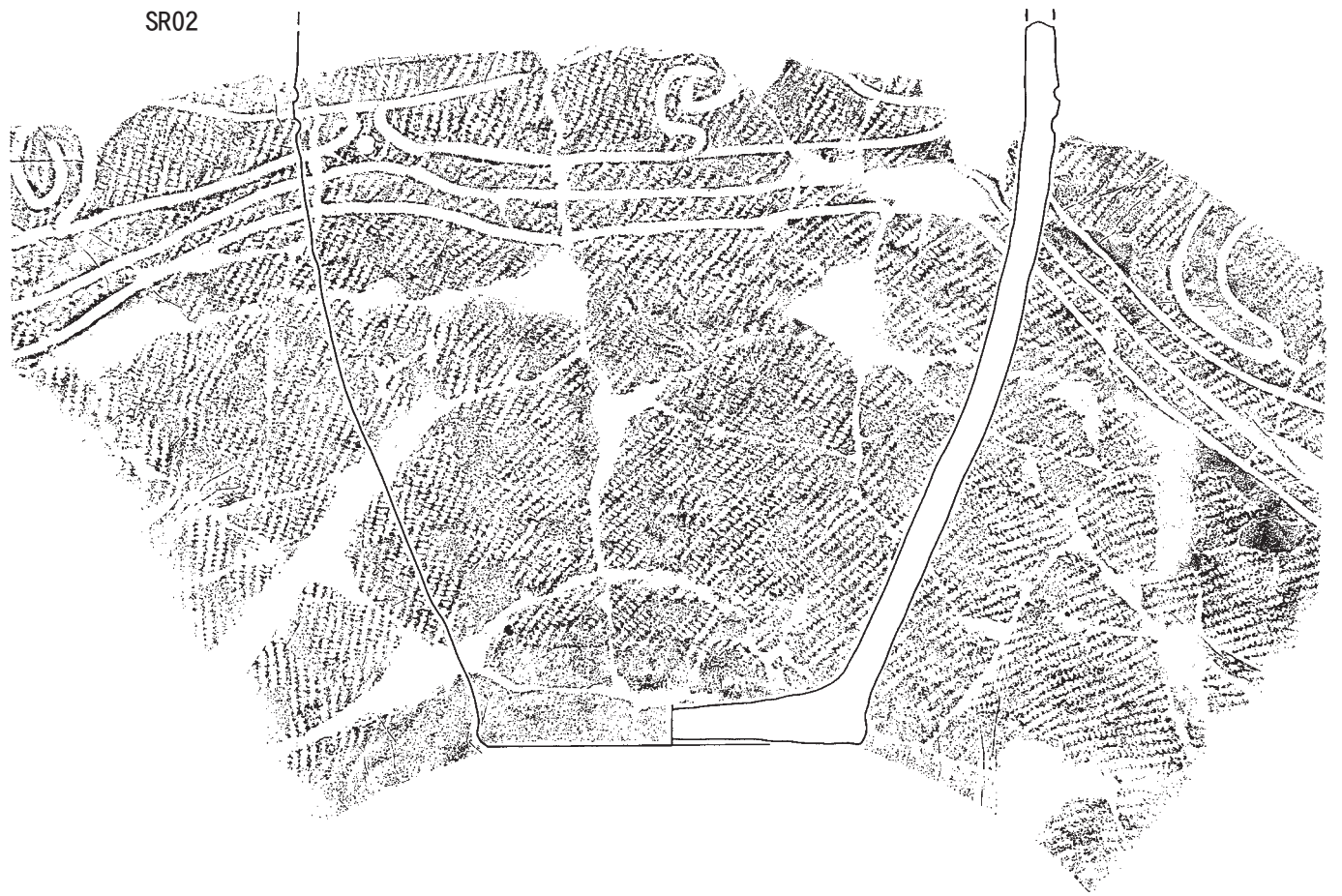


图11 環状列石A埋設土器

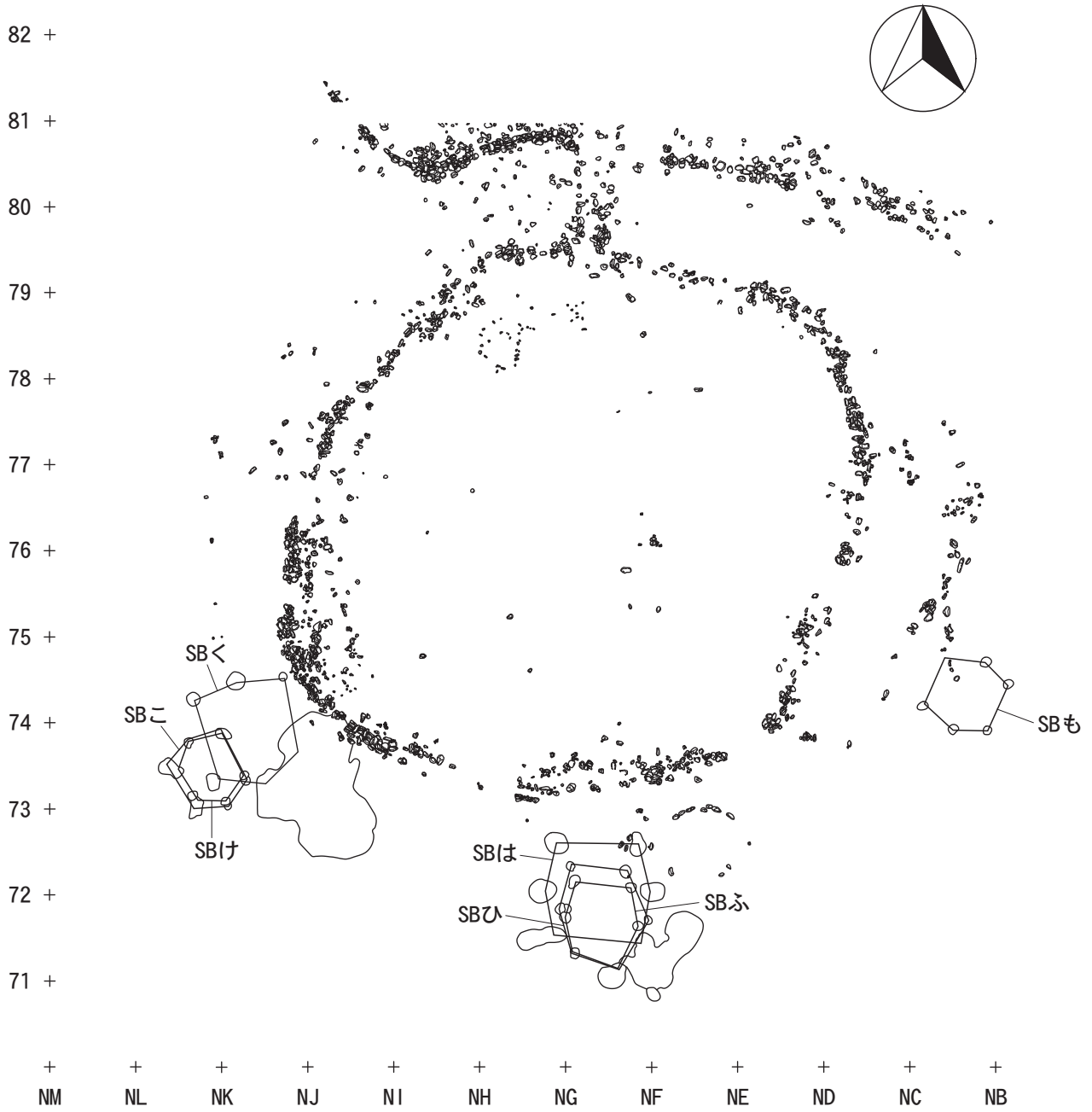


図12 環状列石Aにおける掘立柱建物跡分布図

No.	遺構番号	分類	棟方向	長軸長(m)	長辺長(m)	短辺長(m)	重複	備考
1	SB<	1-1	北東	4.7	4.1	4.0	有	
2	SBけ	1-1	北東	3.2	2.6	2.2	有	
3	SBこ	1-1	北東	3.4	2.7	2.3	有	
4	SBは	1-1	北	4.3	4.3	3.9	有	
5	SBひ	1-1	北	4.0	4.0	2.5	有	
6	SBふ	1-1	北	3.3	3.3	2.5	有	
7	SBも	1-1	北西	3.3	3.1	2.3		

表2 環状列石Aにおける掘立柱建物跡

(5) 道路状遺構

環状列石Aより北側で、列石A構築面と同じ層位の精査中に帯状に広がる硬化面を検出した(図13)。セクション面の観察から検出面が列石構築面と同じ層で基本層序Ⅰ～Ⅱ層には連続しないこと、山中式土壌硬度計で計測し、周辺の土層とは硬度に大きな違いが認められたことから、遺構と判断した。

確認できたのは2条で、規模は確認長28mで、幅0.35～0.45m、硬化面の深さは0.05mを測る。南北方向に延びており、それぞれ蛇行し、硬化の度合いも異なる。2条とも環状列石Aの北側から谷に向かって延びているが、15SF589は列石A開口部付近で東側に曲がることから、対になるものかは定かではない。環状列石に近い地点は明瞭に確認できるが、列石から離れた地点では水分を含んだ状態でないと困難で、実測した2条のほかにも数条の硬化面がわずかにみえることもあった。

検出層位は基本層序ⅢaとⅢb層の間に形成された盛土層上である。盛土層は厚さ0.1～0.25mで、地山ブロックを含む。他遺跡の例では、道路状遺構を構築するために地面を帯状に掘削する例(青森県教委1996)も認められることから、道路状遺構のための盛土を行ったと考えられる。

(6) 道路状遺構(第16次調査報告)

第16次調査では、第15次調査で検出した道路状遺構の続きを明らかにするために、環状列石が造営された台地より一段下がった標高約30mの段丘面で調査を行った。調査区は東西方向にトレンチを設定した(図14)。

丘陵状に盛り上がった地形に設定した(8)トレンチでは、掘り下げを始めると、地山ブロックを多量に含む黒色土層が交互に堆積していて、上位の段丘面からの崩落土が集中して堆積したことが分かったので、深さ1.9mで掘り下げを止めた。

(9)トレンチでは、表土から0.5mで西暦915年の十和田火山を起源とするシラス層(土石流堆積層)を検出した(図15)。鷹巣盆地の標高約30m以下の範囲で厚く堆積している。調査区には重機の侵入が不可能であるために、2×2mのサブトレンチを設定し、極めて硬く締まったシラス層を人力で掘り下げることにした。1.3m掘り下げたところで古代の旧地表面を確認できたが、シラス層の崩落の危険もあったことから、掘り下げを断念した。この調査区から東に約20m離れた地点で実施したボーリング調査の成果(鷹巣町教委2002)からすると、表土から縄文時代の層まで5～6mの深さと考えられる。

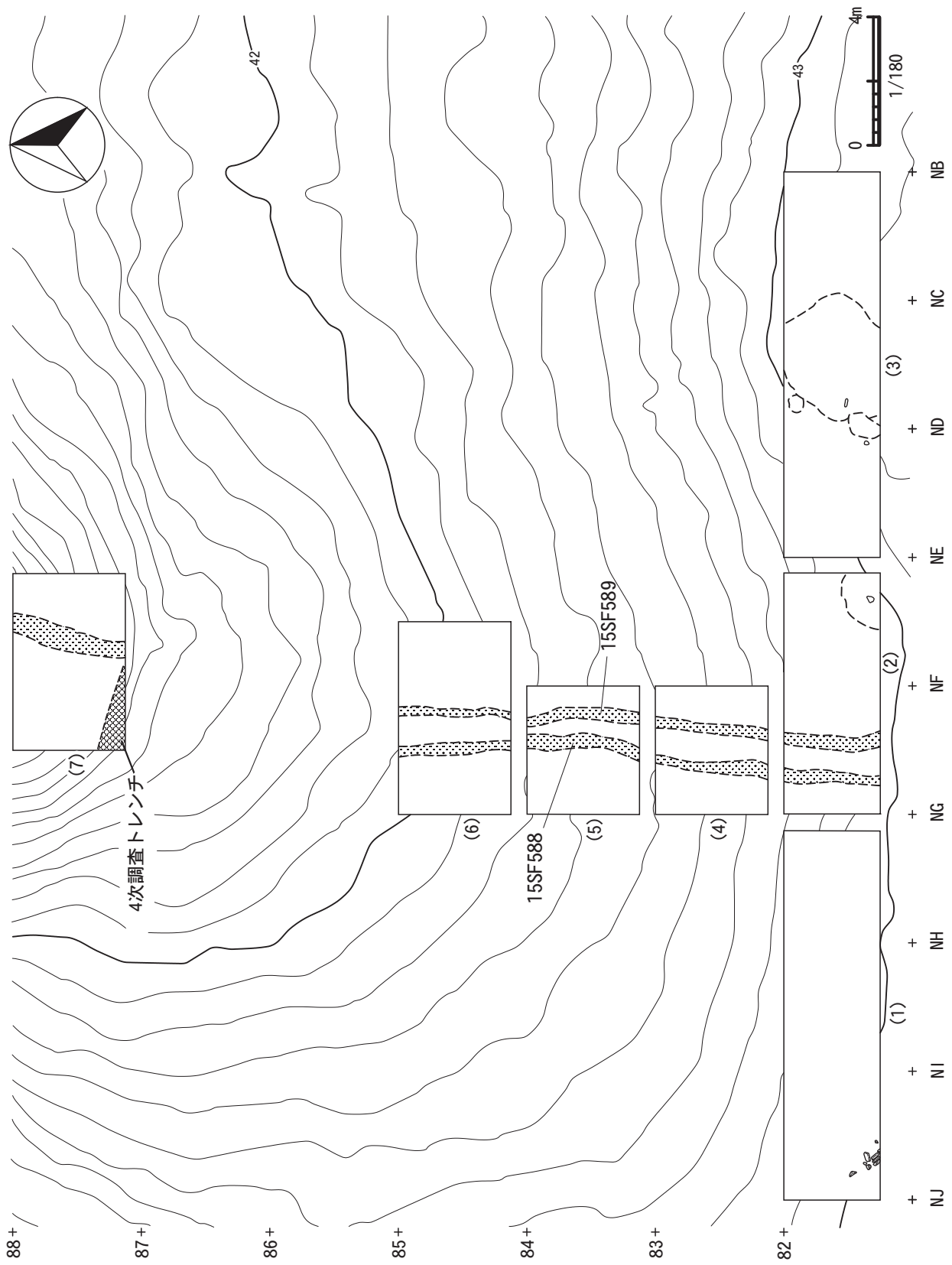


図13 環状列石Aと道路状遺構

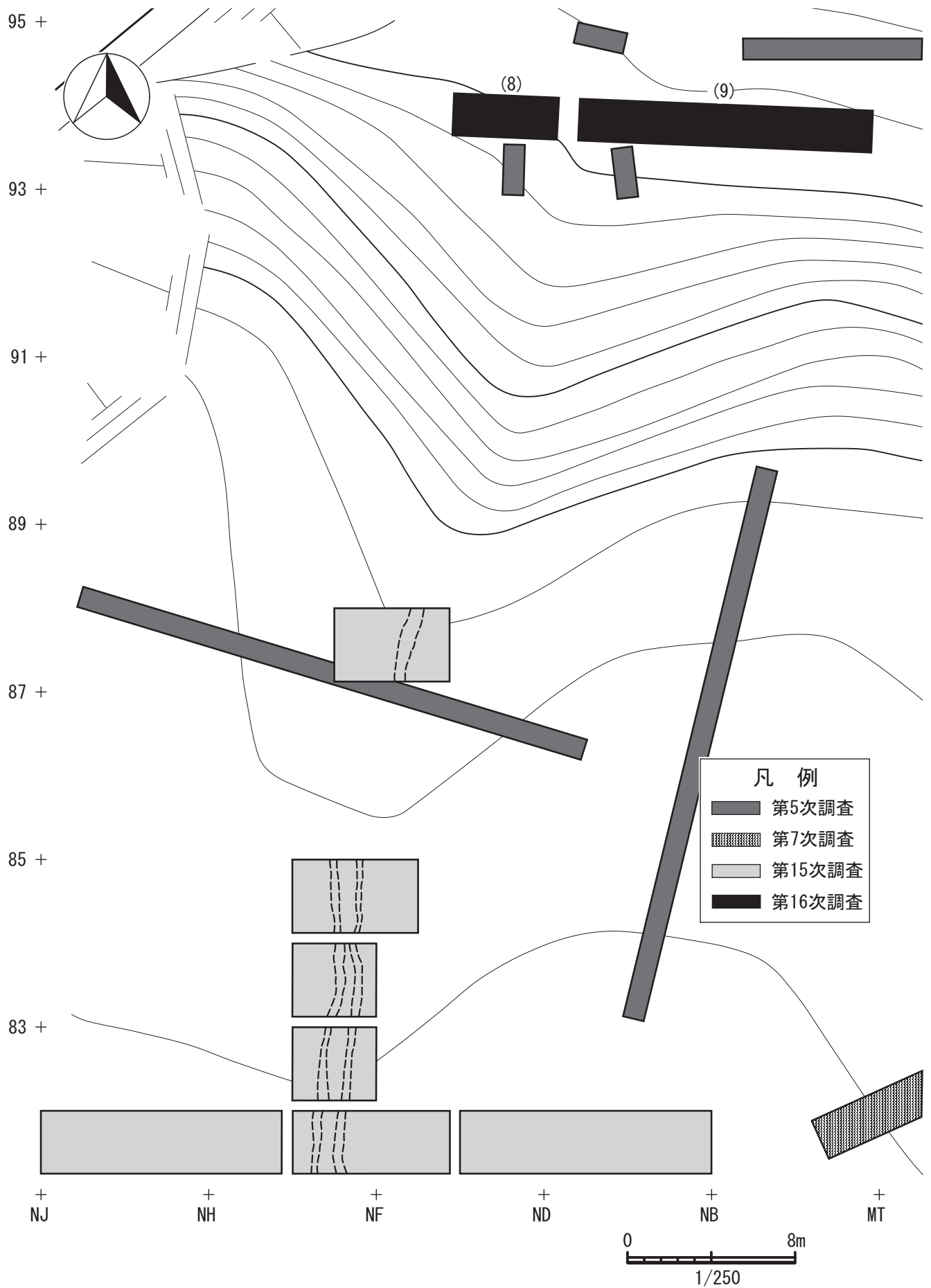
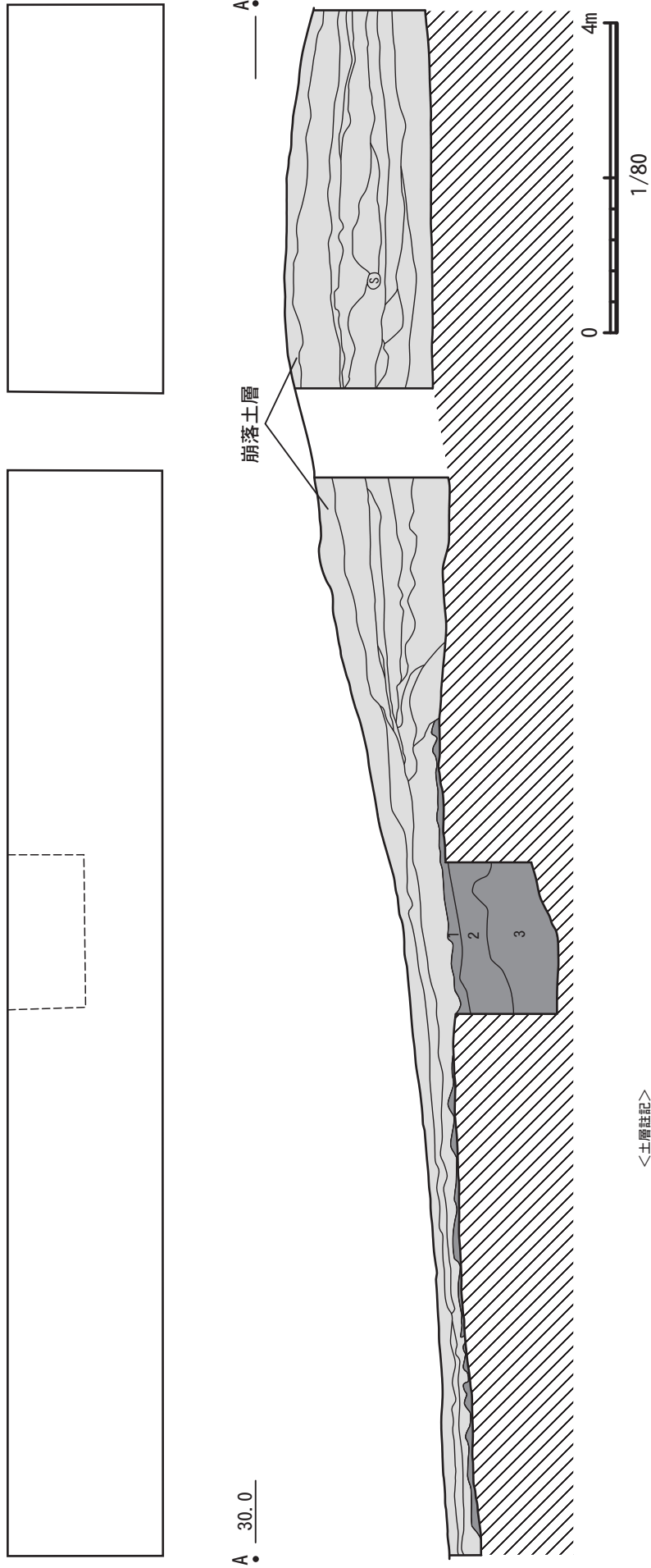


図14 第16次調査トレンチ配置図

+
ND93



+
NA93



<土層誌記>

1. にぶい黄橙色(10YR 7/2)シラス層と黒色土の混在層。
2. 灰白色(10YR 7/1)シラス層で粒子が粗い, 十和田土石流。
3. 灰白色(10YR 7/1)シラス層で粒子が細かい, 十和田土石流。

図15 第16-調査トレンチ平面図・断面図

(7) 捨て場

環状列石Aから東側の台地縁辺部にある、沢状地形がいわゆる捨て場として利用されていた。沢は隣接して2ヶ所あり、東側から沢A・沢Bとした(図16)。沢Aは規模が長軸25m、短軸10mで、深さが最深部で2mを測る。沢Bは縦軸30m、短軸9mで、深さはもっとも深いところで2mを測る。

大湯環状列石では環状列石の周囲から遺物を多く出土する廃棄帯があるが、この環状列石Aは、環状列石B・Cが隣接し、様々な遺構が集中していることから、代わりに沢状地形を利用し、遺物を廃棄していたと考えられる。

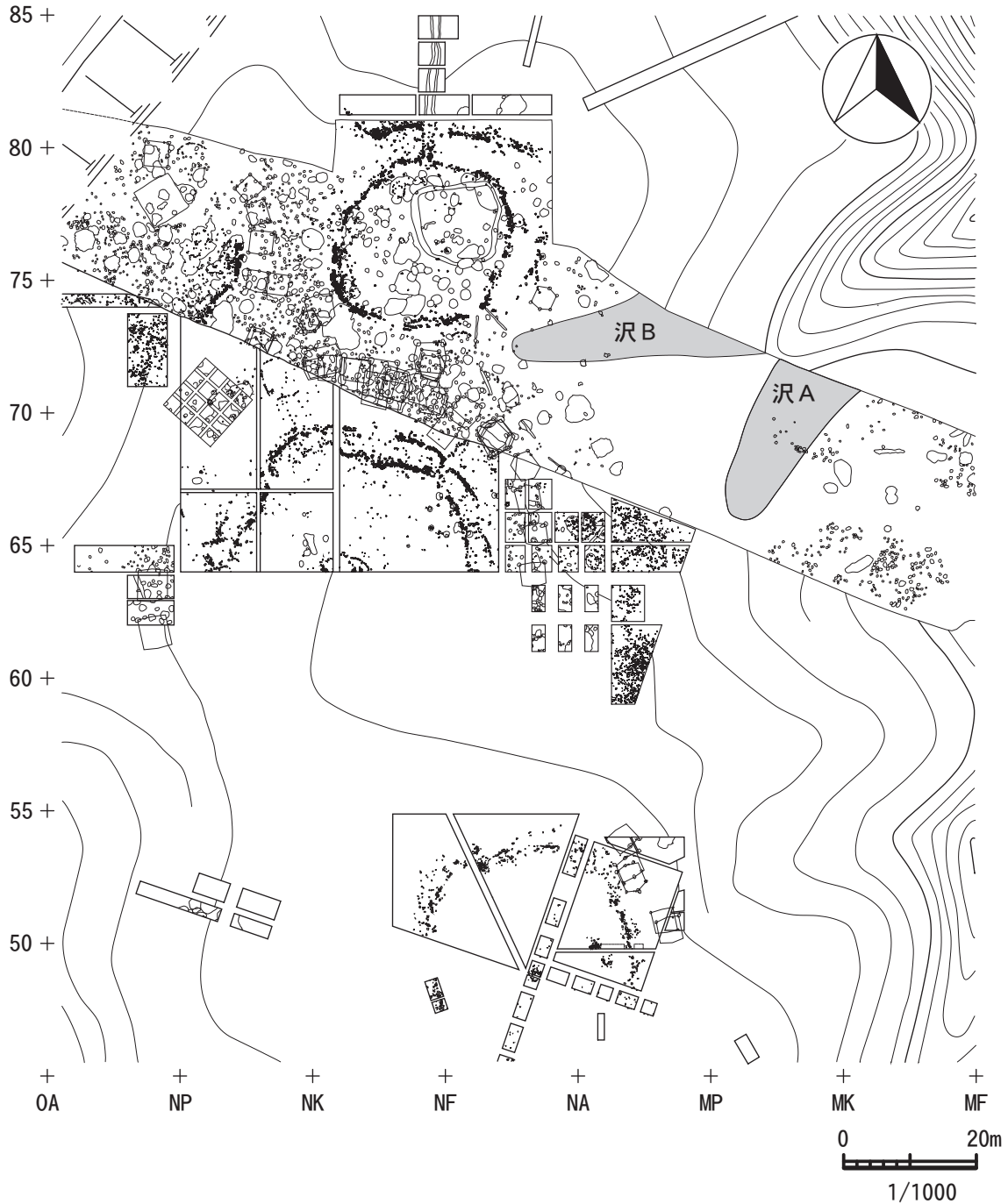


図16 沢A・B分布図

2. 環状列石B

グリッドNN73～NO77の範囲に位置する(付図2)。環状列石Aから西に15m離れた台地の西側で、4つの環状列石のうち最も西側である。

形態は弧状で、規模は長さ15mを呈する。列石が存在しない部分にも外周の掘立柱建物跡が構築されており、円環が意識されていることから環状列石と認定した経緯がある。環状と推定される大きさは、およそ30mである。「未完成の環状列石」とも呼ばれており、調査では礫の抜き取り痕や後世の攪乱は確認できなかったことから、構築が何らかの理由で中断された(秋田県教委1999)と考えられる。環状列石Bの南部分を調査したが、環状列石のようなまとまった単位は検出されなかった。このことも列石構築の中断を裏付けるだろう。

環状列石はIV b層中に構築されている。環状列石Aと同様に列石構築に伴い、円環の内側を地山まで削平し、列石内側に整地層であるIV b層を整え、構成礫を設置している(秋田県教委1999)。

構成する礫は309個で、第5章でも述べるように流紋岩・ひん岩を主体とする、13種類の石材で構成されている。

環状列石を構成するブロックを4つに分類した(図17)。ブロック02・03は小牧野式に近似する。ブロック04は放射状の配列がみられる。

環状列石の周辺からは、配石遺構・掘立柱建物跡・埋設土器・焼土遺構・土坑を検出している。列石下部の土坑は他の環状列石と比べて最も多い。

環状列石Bの西側の地形は、張り出すように広がっていたことは地形測量からわかっているが、昭和初期に敷設された阿仁合線(現：秋田内陸縦貫鉄道)で削られたと考えられる。その時の工事の際に土器や石器が出土したことが伝わっている。

(1) 配石遺構

環状列石Bの周囲から配石遺構を1基検出した(図18)。SQ10Aは礫を50個以上用いた弧状の配石遺構で、南半分は礫が散らばっており、配石列が不明瞭だが円形の場合は直径約4.5mである。この遺構と伴うもので、焼土遺構SN10Bがある(秋田県教委1999)。規模は直径0.7mを測り、焼土面はさほど硬化していない。また、周囲に柱穴(SK P261・263など)が多く分布することから、環状列石AのSQ310と同様の掘立柱建物跡の一形態の可能性はある。

(2) 掘立柱建物跡

環状列石Bの同心円状外周から9棟の掘立柱建物跡を検出している(図20)。そのうち、「SBき・か・お」の3棟、「SBえ・め」の2棟が重複している。「SBえ」は4本柱の建物跡である。

ほとんどの建物跡は長軸長が3mを超えるもので、規格性が強い。そのなかで最小のものは「SBあ」で長軸長2.9m・長辺長3.2m・短辺長3.0mを測り、最大のものは「SBむ」で、長軸長3.5m・長辺長3.6m・短辺長3.2mを測る。

(3)埋設土器

環状列石Bの周囲からは3基の埋設土器を検出している(図18)。

SR81はやや横位で埋設されたもので、環状列石Bの列石が存在しない延長上に位置する。環状列石内で埋設土器が設置されることを踏まえると、環状列石Bは当初から円環が意識されていたことを窺える資料である。土器の胴部には入組文が描かれており、この遺跡でもっとも古い段階であろう。

SR491は正位で埋設され、土器内から礫が出土している。

(4)焼土遺構

環状列石Bの周辺で6基の焼土遺構を検出した(図18)。環状列石の内側では3基、外側では3基である。

環状列石Bより南東側で検出されたSN3は石囲炉である。礫を10個以上用いて、規模は径0.5mを測る。石で囲われた内側は焼土が分布している。

SN83は長径1.0m短径0.7mで、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。周囲から礫が多く散らばった状態で検出した。

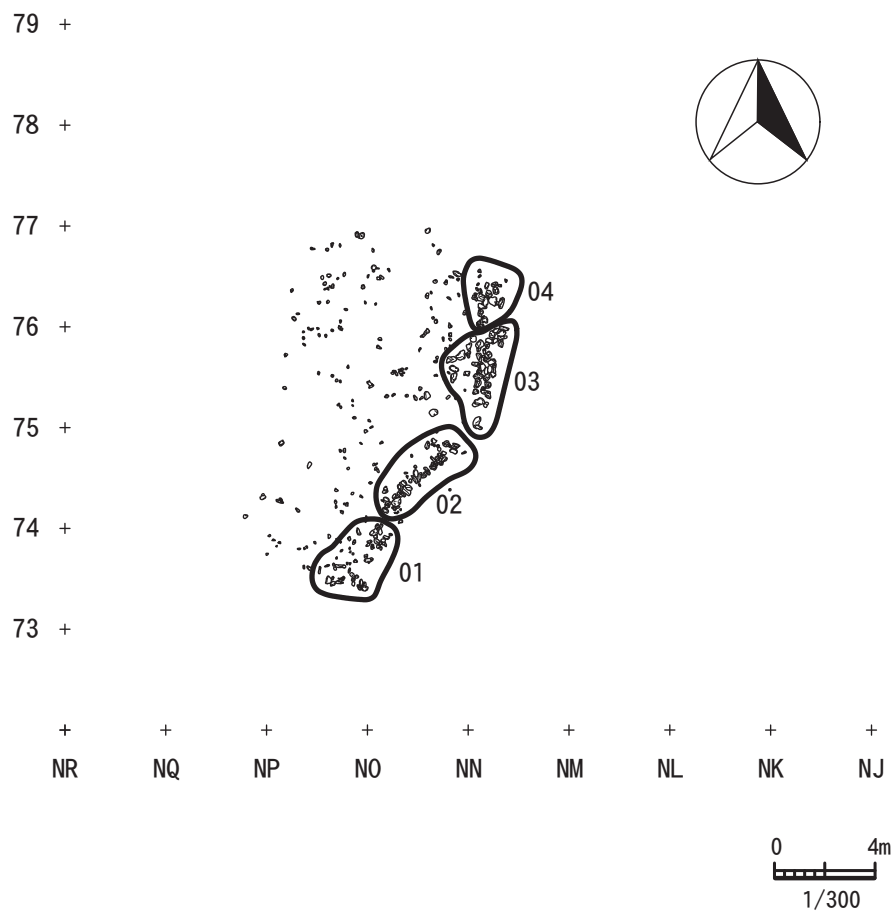


図17 環状列石Bブロック配置図

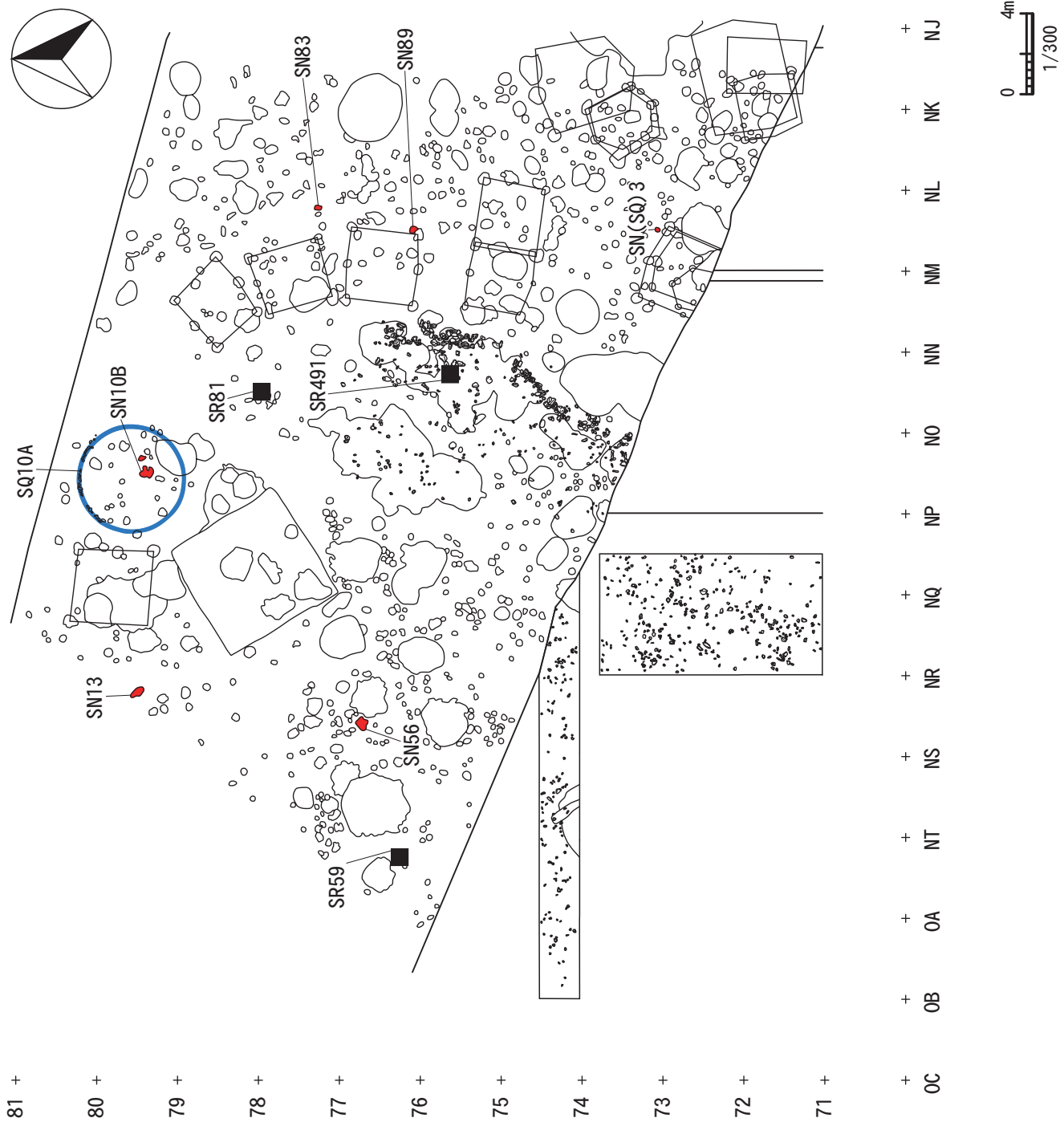
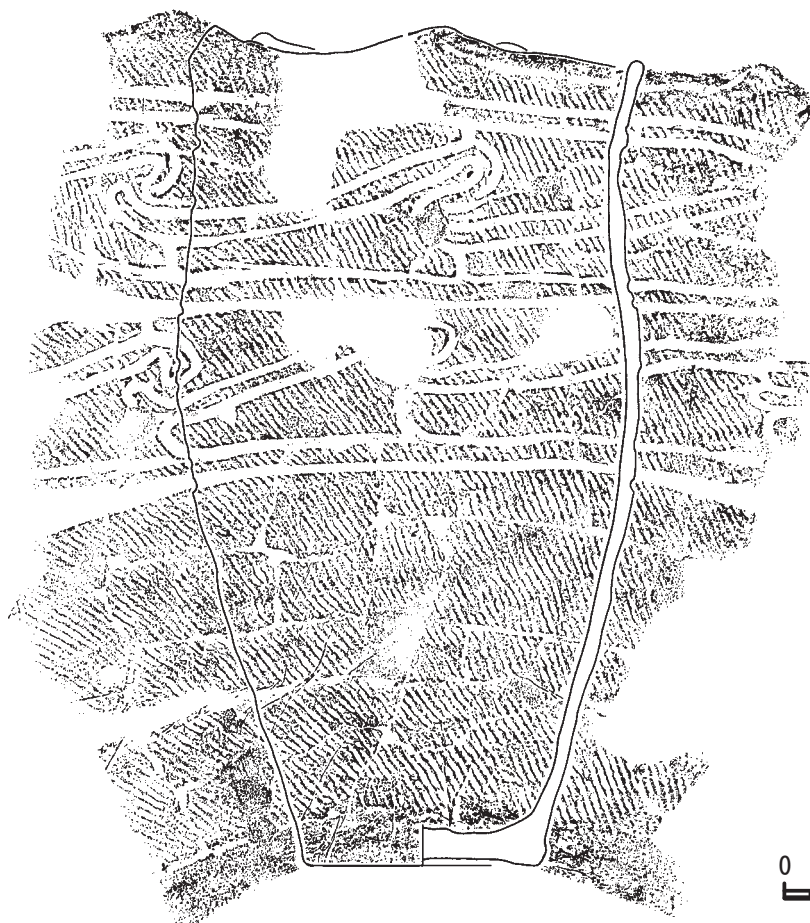


図18 環状列石Bにおける配石遺構・埋設土器・焼土遺構分布図

SR81



SR491

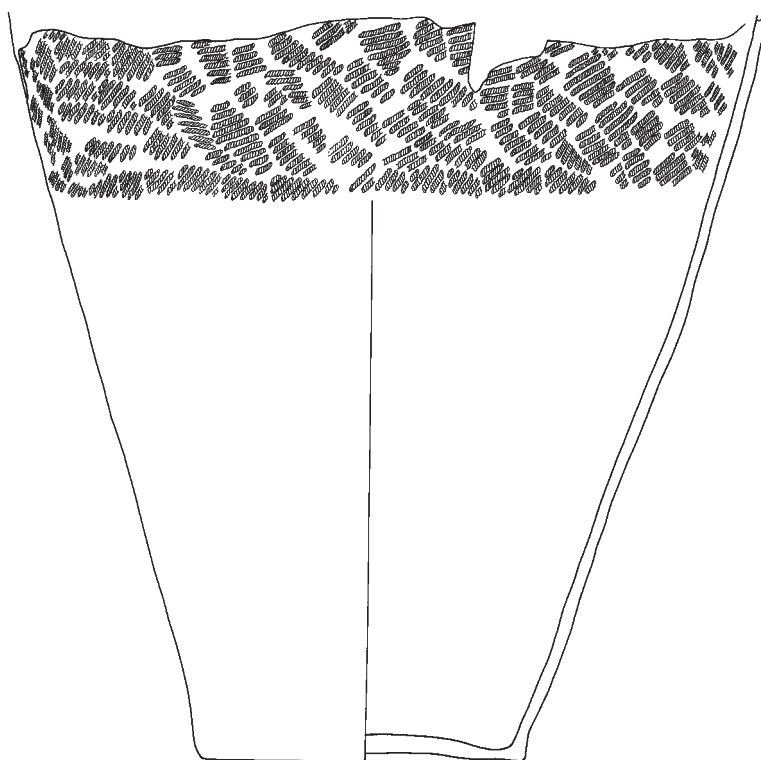


図19 環状列石B埋設土器

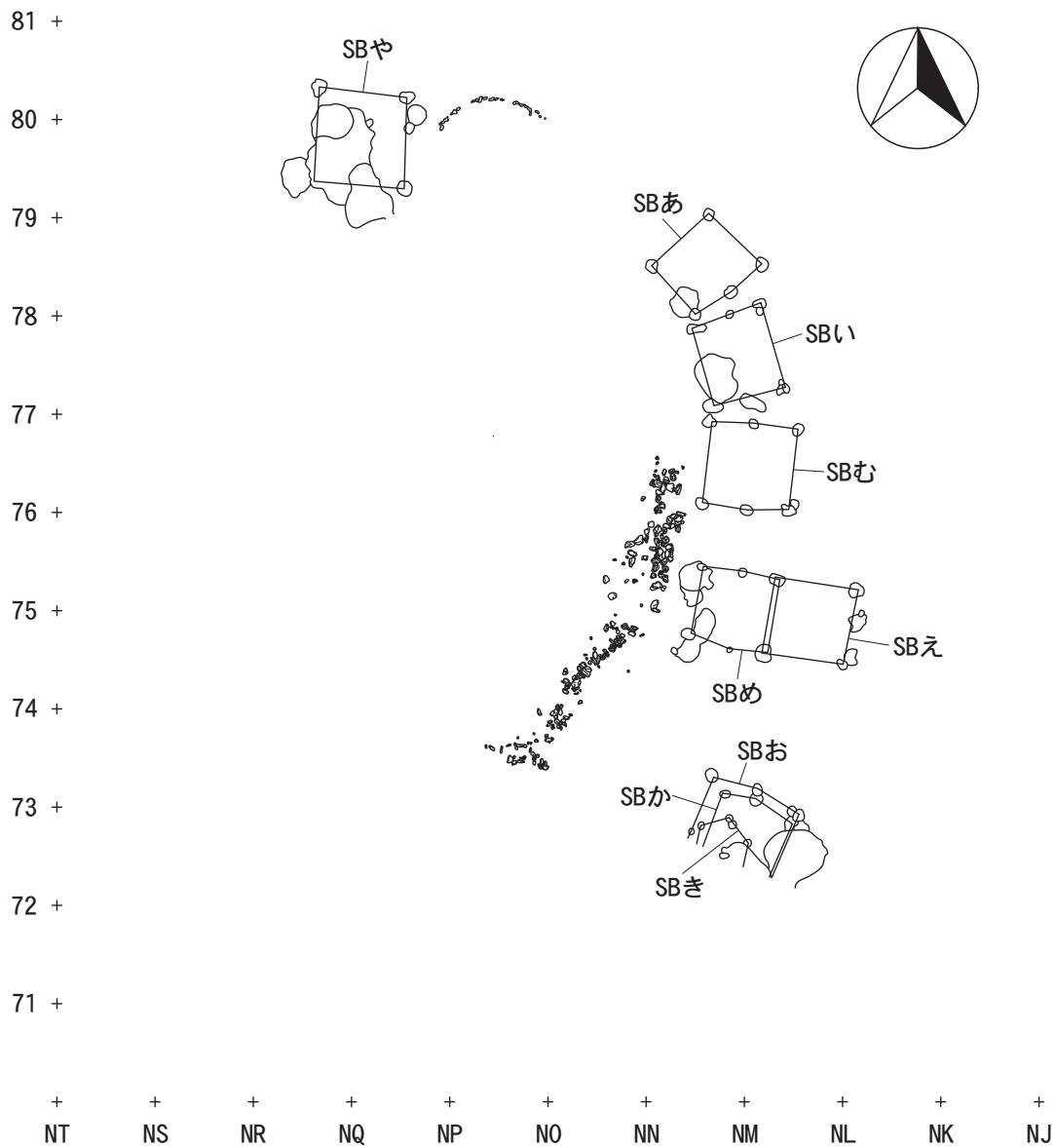


図20 環状列石Bにおける掘立柱建物跡分布図

No.	遺構番号	分類	棟方向	長軸長(m)	長辺長(m)	短辺長(m)	重複	備考
1	SBあ	1-2	南西	2.9	3.2	3.0		
2	SBい	1-2	南西	3.4	3.4	3.3		
3	SBえ	2	西	-	3.3	3.0	有	4本柱の建物跡
4	SBお	1-1	北西	-	-	3.8	有	
5	SBか	1-1	北西	-	-	3.2	有	
6	SBき	1-1	北西	-	-	2.0	有	
7	SBむ	1-2	西	3.5	3.6	3.2		
8	SBめ	1-2	西	3.0	3.2	2.8	有	
9	SBや	1-2	南	3.5	3.9	3.9		

表3 環状列石Bにおける掘立柱建物跡

3. 環状列石C

グリッドND58～NP70の範囲に位置する(付図3)。環状列石Aより南側に17m離れた地点で、4つの環状列石の中心に位置し、本遺跡の中で最大の遺構である。南部分は現在は未調査で保存している。

形態は内帯と2条の外帯(外帯1、外帯2)で構成された三重の円環で、規模は直径45×42mの楕円形を呈している。列石に用いられる礫の数は1281点で、石材は凝灰岩、流紋岩、安山岩、ひん岩を主体とした27種類を確認している。ブロックは50ヶ所に分類した(図21)。

ブロック01～03が内帯に相当する。内帯の推定径は径7.5mの円環で、外帯と同じような棒状や扁平な礫が用いられている。

ブロック04～50は外帯にあたる。推定径は外帯1は40m×39m、外帯2は45m×42mで、外帯1と2の間隔は平均5mを測る。2条の外帯が鎖状に連結しており、北側だけでも6単位を認めることができる。鎖状の連結部分から、ブロック32のように列石外側に2条一対の石列が延びている。このような開口部は北東側と北西側に存在する。特に北西側は方形の配石遺構(6SQ01)と連結していることは注目できる。

ブロック17・20・29・33は、連続する小牧野式である。これらに隣接するブロック06・08・28・35もやや石が不足しているが同等のものと考えられる。ブロック34のように礫を縦位に連続させるものもみられる。ブロック38は放射状に礫を配置している。ブロック45は直径1mの方形に区画しているようみえるが、区画内の下部は未調査である。外帯1の北東開口部付近に位置するブロック10は「田」のような石組で、一辺が1.3mを測る。小牧野遺跡特殊組石や万座24号に近い形状である。

未調査の南部分は、ハンドボーリング探査の成果から、ある程度の構成礫の分布を推測することができる。鎖状の単位が少なくとも4つ以上あると考えられる。配列は整ったものではなく、南東部分においては外帯2の構成礫は少ないのだろう。

地山まで削平し、盛土層(M層)で整地し、礫を配置している(図38)。内帯側より外帯部分の方が盛土層を厚く盛土するので、外帯の接地面は高いレベルにあり、内帯に向かって傾斜するようになる。

下部土坑の分布を調査のために、グリッドNJに沿って南北方向にサブトレンチで掘り下げた。グリッドNJ69～71で重複した土坑やピットを確認した(図39)が、環状列石A・Bと比べて極端に少ない。

環状列石の周辺からは、配石遺構や掘立柱建物跡・埋設土器・焼土遺構・竪穴住居・土坑が多く検出されている。